

江戸川乱歩の世界
陰獣

目次

江戸川乱歩の世界

陰獣

- 一、 二人の出会い
- 二、 静子の生い立ち
- 三、 脅迫の手紙
- 四、 大江春泥しゅんでいの生活
- 五、 新たな脅迫状
- 六、 屋根裏の遊戯
- 七、 事件の経緯
- 八、 事件の手がかり
- 九、 本格的な推理 其の一
- 十、 ひとときの逢瀬おうせ
- 十一、 本格的な推理 其の二
- 十二、 事件の結末

※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
陰獣

江戸川乱歩の「陰獣」

例えば、江戸川乱歩には実に多種多様な「作品」があるかと思うが、その中でも、比較的评价の高い『陰獣』を取り挙げて、その「内容」をいろいろと考察してみたいと思う。

*

*

まず、本文の「冒頭」は、次のような内容から始まるものである。つまり、「……私は時々思うことがある。探偵小説家というものには二種類あって、一つの方は犯罪者型でも言うか、犯罪ばかりに興味を持ち、たとえ推理的な探偵小説を書くにしても、犯罪の残酷な心理を思うさま書かないでは満足しないような作家であるし、もう一つの方は探偵型でも言うか、ごく健全で、理智的な探偵の径路にのみ興味を持ち、犯罪者の心理などには一向頓着しないような作家であると。そして、私がこれから書こうとする探偵作家大江春泥は前者に属し、私自身は恐らく後者に属するのだろう」とある。もちろん、江戸川乱歩という作家は、その両方を兼ね合わせた作家であったということになるのだろう。

そして、この前の「事件」を振り返っては、「……恐らく、私ほど道徳的に敏感な人間は少ないと言ってもいいのだろう。そのお人好して善人な私が、偶然にもこの事件に関係したというのが、抑も事の間違いであった。若し私が道徳的にもう少し鈍感であったならば、こんな恐ろしい疑惑の淵に沈まなくても済んだであろう。いや、それどころか、私はひよつとしたら、今頃は美しい女房と身に余る財産に恵まれて、ホクホクもので暮らしていたかも知れないのだ」とある。……

一、二人の出逢い

それは、昨年うえのの秋、十月なかばのこと、「……私は古い仏像ぶつぞうが見たくなり、上野の帝室博物館の、薄暗くガランとした部屋を、足音を忍ばせて歩き廻っていた。博物館というものが、どうしてこうも不人気であるかと疑われる程そこには人影がなかった。丁度私ふにんきが、ある部屋の陳列棚の前に立って、古めかしい木彫りの菩薩像ぼさつぞうの、夢のようなエロティックに見入っていた時、うしろに、忍ばせた足音と、幽かな衣きぬずれの音がして、誰かが私の方へ近づいて来たのが感じられた。私は何かしらゾツとして、前のガラスに映る人の姿を見た。そこには、今の菩薩像と影を重ねて、黄八丈きはちじょうの様な柄がらの袷あわせを着た、品のいい丸鬚まるまげ姿の女が立っていた。女はやがて私の横に肩を並べて立止り、私の見ていた同じ仏像にじつと眼を注ぐのであった」とある。

*

*

さて、これが、有名な「二人の出逢い」の場面であるが、ここで最も大事なことは、次のようなことである。つまり、「……どうしてこうも不人気であるかと疑われる程そこには人影がなかった」とある。それなのに、そのような場所に、どうして「女性がたった一人」で、このような不人気な博物館に来たのだろうか？ しかも、展示されている陳列品などは、いたるところに数多くあるというのに、なぜ、彼女は、主人公のいるところへと敢えて近づいて来たのだろうか？ それは、主人公自身、「……誰かが私の方へ近づいて来たのが感じられた。私は何かしらゾツとして、前のガラスに映る人の姿を見た」とある。それは、一人の男性としてドキドキするような気持ちとともに、「……なにかおかしい、

こんなところに、女がたった一人で来るのもおかしいし、また、迷うことなく、自分の方へと近づいて来るのもおかしい」と、直感的に感じたからこそ、まさに「……私は何かしらゾツとして、前のガラスに映る人の姿を見た」のである。つまり、ほかに誰もいない、しかも、どこの誰かも知れない男一人でいるところに、しかも、いつ何をされるかも知らないそんな男一人のところに、何の躊躇もなく、女がたった一人で近づいていくものだろうか？ ふつう、警戒するものだろう。——つまり、彼女は、彼が誰であるかはよく知っていて、最初から、すべて「計画的に主人公に近づいて行った」ということである。だからこそ、彼女にはためらいというものが無いのである。……

*

*

さて、彼女と私とはそこに並んでいた陳列品について並んで二言三言口を利き合ったのが縁となつて、それから博物館を一巡して、そこを出て上野の山内を山下へ通り抜けるまでの長い間、道づれとなつてポツツリポツツリと、色々の事を話し合つたのである。

彼女は、青白い顔をしていたが、あんなに好ましい青白さを私は嘗つて見たことがなかった。それは、この世に若し人魚というものがあるならば、きっとあの女の様な優艶な肌を持つているに相違ない。そして、話をして見ると、彼女の美しさは一段と風情を増して来る。なかでも彼女が笑う時の、恥じらい勝ちな、弱々しい美しさには、私は何か古めかしい油絵の聖女の像でも見ている様な、又はあのモナリザの不思議な微笑を思い起こす様な、一種の感じに打たれないではいられなかった。

だが、若し私が彼女の項にあの妙なものを発見しなかったならば、彼女はただ上品で優しく弱々しい、触れば消えてしまいそうな美しい人という以上に、あんなにも強く私の心を惹かなかつたであらう。——それは、上野の山内を歩いてる間に、私はチラと見てしまった。彼女の項には、恐らく、背中の方まで深く、赤痣の様な太い蚯蚓腫れが出来ていたのだ。それは生れつきの疵の様な見えだし、又、そうではなく、近頃出来た傷痕の様にも思われた。それを見ると、今迄夢の様に思われた彼女の美しさが、俄かに生々しい現実味を伴つて、私に迫つて来るのであつた。

*

*

さて、この場面は、彼女の「容姿・容貌」の特徴などを事細かに描いているが、しかし、大事なことは、見た目は、いかにも上品で優しく弱々しい、触れば消えてしまいそうな美しい人という印象を与えているが、しかし、その実は、彼女の「項から背中の奥へと赤痣の様なものを持つ女性」として、決して「ふつう一般の女性とは少し違う」という印象を与えているのである。——そして、彼女は、合資会社碌々商會の出資社員の一人である実業家小山田六郎氏の夫人、静子であること、また、彼女は、探偵小説の読者であり、殊に私の作品は好きで愛読しているということで、作者と愛読者との関係から、二人は、自然と親しくなり、その美しい人と、それから度々手紙のやり取りをする程の間柄となるのである。もちろん、それこそは、静子の、まさに「狙い」そのものなのである。

二、静子の生い立ち

さて、静子と主人公との手紙の上での交際は、そうして数ヶ月の間続いた。やがて、静子から、「……一度御相談したいことがあるから、御伺いしても差支ないですか」という

端書が来たので、「お持ちしています」という私の返事を受け取ると、直ぐその日のうちに訪ねて来た静子は、実は「脅迫されていること」を告げて、その「いきさつ」を彼女の幼年時代からの身の上話などを交えながら、次のような異様な事を語るのであった。

彼女の郷里は静岡であり、彼女はそこで女学校を卒業する間際まで、至極幸福に育つたとある。たった一つの不幸と言えるのは、彼女が女学校の四年生の時、平田一郎という青年の巧みな誘惑に陥って、ほんの少しの間彼と恋仲になったことであつた。彼女は十八の娘のちよつとした出来心から恋の真似事をして見ただけであつたが、相手は真剣であつたために、彼女にうるさくつきまとうようになり、終には深夜家の塀外をさまよう黒い人影や郵便受に気味の悪い脅迫状が舞い込んだりしていた。両親ともどもそのことに胸を痛めていたが、丁度、その時、彼女の一家に大きな不幸が訪れ、それは、当時経済界の大変動から、彼女の父は、多額の借財を残して、商売をたたんで、殆ど夜逃げ同然に、身を隠さねばならぬ羽目になつたのである。

その結果、彼女は、女学校を中途退学になつたが、一方、平田一郎からは逃れることができた。そして、父親は、それが元でやがて病気で亡くなり、母親との貧しい二人暮らしをしていたが、やがて、同じ村の出身者である実業家の小山田氏が彼女を見染めて、結婚を申し込み、母親と共に、東京の邸に住むようになる。それから七年の歳月が流れ、彼女の母親は、三年後に病気で亡くなり、それから暫くして、小山田氏が会社の要務を帯びて、二年ばかり海外に旅をし、帰国したのは一昨年暮れであり、その二年の間、静子は、毎日、茶、いけ花、音楽等の師匠に通つて、独居の淋しさを慰めていたという。もちろん、夫婦仲は至極圓滿であり、幸せな月日が続いていたが、ただ、結婚する時、彼女は、小山田に嘘をついて、平田一郎のことをつい隠してしまい、あくまで小山田の他には男は知らないと言ひ張つていたのである。

さて、ここまでの内容は、静子の生い立ちと家族との関係や小山田との出逢いから今日までの経過などが、実によく説明されていて、現在までの状況がはつきりと分かるとともに、夫の小山田氏は大の奮闘家で、その七年間にメキメキと財をふやし、今では同業者の間に押しも押されぬ地盤を築いていたのである。その実業家小山田氏の夫人として、静子は、毎日、幸せな生活を送っていたが、突然、かつての恋人であつた平田一郎から脅迫を受けるようになるのである。しかも、そのかつての恋人平田一郎という人は、今やなんと有名な探偵小説家の「大江春泥」となつていたのである。……

三、脅迫の手紙

それでは、その「脅迫の手紙」であるが、その「本文」はかなり長いので、それをごく簡単に要約すると、それは、次のようなものである。

静子さん、私はとうとう君を見つけた。私は君に出逢つた場所から君を尾行して、君の邸を知ることが出来た。小山田という今の君の姓も分つた。私は君に捨てられてどれ程悶えたか、薄情な君には分るまい。君は、私の情熱が燃え立てば燃え立つ程、益々冷かにな

って行った。私を避け、私を恐れ、遂には私を憎んだ。君は恋人から憎まれた男の気持を察しることが出来るか。私の悶えが嘆きとなり、嘆きが恨みとなり、恨みが凝って、復讐の念と変わって行ったのが無理であろうか。——そして、復讐を誓ったのだ。

私は貧乏だった。食う為に働かねばならぬ身の上だった。だが、三年ばかり前、私に予期せぬ幸運が巡って来た。私はあらゆる職業に失敗して、失望のどん底にある時、うさはらしに一遍の小説を書いた。それが機縁となつて、私は小説で飯の食える身分となつたのだ。君は今でも小説を読んでいるのだから、多分大江春泥という探偵小説家を知っているだろう。彼はもう一年ばかり何も書かないけれど、その大江春泥こそかく言う私なのだ。

静子さん。生活の安定を得た私は、金と時間の許す限り、君を探し出す為に努力した。勿論君の愛を取り戻そうというのではない。私には已に妻がある。生活の不便を除く為に娶つた形ばかりの妻がある。——私は長い間、小説の筋を組み立てる時と同じ喜びを以て、君への復讐手段を組み立てて来た。最も君を苦しめ、最も君を怖がらす方法を熟慮して来た。愈々それを実行する時が来たのだ。

また、私は私の復讐事業の一端を漏らすことを惜しむ者ではない。例えば、今から三日前、即ち、一月三十一日の夜、君の家の中で君の身辺に起つたあらゆる些事を、寸分の間違ひもなく、君に告げることが出来る。(中略)、君は、この汽車の時間表の様に忠実な記録を読んで、恐怖を感じないでいられるだろうか。

二月三日深夜

我が生涯より恋を奪いし女へ

復讐者より

*

*

例えば、本文の中に、「……私は君に捨てられて、どれ程悶え苦しんだか、薄情な君には分るまい。君は、私の情熱が燃え立てば燃え立つ程、益々冷かになつて行った。私を避け、私を恐れ、遂には私を憎んだ。——君は恋人から憎まれた男の気持を察しることが出来るか。私の悶え(苦しみ)が嘆きとなり、その嘆きが恨みとなり、その恨みが凝って、復讐の念と変わって行ったのが無理であろうか?」とある。これは、まさに「ストーリー心理」そのものである。——つまり、「……自分は、なぜ、そこまで嫌われ、また、なぜ、そこまで憎まれなければならないのか!」と、私は、それがどうしても「許せない」ということである。その結果、——君が最も苦しみ、また、君が最も怖がる方法で、愈々、その「復讐」を実行する時が来たということである。……これは、何度も繰り返すようであるが、これは、まさに「ストーリーカーの犯罪心理」そのものである。

また、有名な探偵小説家「大江春泥」という人は、三年前、突然、文壇に登場して来て、人気を博し、二年間、文筆活動をしたあと、彼はもう一年ばかり何も書いていないとある。これは、例えば、四年前、「……小山田氏が会社の要務を帯びて、二年ばかり海外に旅をし、帰国したのは一昨年暮れであり、その二年の間(夫の留守の間)、静子は、毎日、茶、いけ花、音楽などの師匠に通つて、独居の淋しさを慰めていたという」時期と、ぴったりと符合するのである。——つまり、静子は、夫が二年間海外に旅に出ている間、毎日、茶、いけ花、音楽等の稽古に通つて、独居の淋しさを慰めていたという名目で、実は、いわゆる「大江春泥」という作家名で、探偵小説などを書いていたのである。そして、一年前、夫が帰国したので、その時から文筆活動はやめているのである。つまり、恋人「平田一郎」も探偵作家「大江春泥」というのも、すべて静子の「一人芝居」に過ぎないのであり、それゆえ、この「脅迫状」も、静子自身が書いたものであり、だからこそ、

「……今から二日前、即ち、一月三十一日の夜、君の家の中で君の身边に起ったあらゆる些事を、寸分の間違いもなく、君に告げることが出来る。(中略)、君は、この汽車の時間表の様に忠実な記録を読んで、恐怖を感じないでいられるだろうか」とあるが、それは、まさに「静子自身」が脅迫状を書いているからこそ、そういうことが出来るのである。つまり、かつての恋人「平田一郎」という存在は、ほんとうに実在していて、しかも、実際に静子と「恋愛関係」があつたのかどうかは厳密にはよく分からないのであるが、しかし、少なくとも探偵作家「大江春泥」とその「妻」という存在は、静子が「勝手にでっち上げた架空の人物たち」であると共に、それは、まさに「静子自身」が演じていたものでもあるのである。

四、大江春泥の生活

さて、『陰獣』の「物語」(ストーリー)は、次のように展開して行く。つまり、平田の脅しの手紙は、その他に三通ばかりあり、いずれも復讐の呪詛の言葉のあとに、静子のある夜の行為、殊に、彼女の寝室での秘密は、どの様な淫靡な点までも、まざまざと描き出されていた。——静子は、その様な手紙を他人に見せることは、どれ程恥ずかしく苦痛であつたか、それを忍んでまで、彼女が私を相談相手に選んだのは、よくよくのことであり、それは、彼女が過去の秘密を、つまり、彼女が結婚以前既に処女でなかつたという事実を、夫の六郎氏に知られることを、どれ程恐れていたかということを示すものであり、同時に、彼女の私に対する信頼がどれほど厚いかを示すものでもあつたのである。

そこで、探偵作家「寒川」は、まず、大江春泥の所在をつきとめようとした。それは、女の腐った様な猜疑に満ちた燥言で、変態読者をやんやと言わせて得意がつている彼が無性に癢に觸つて、彼のこの陰險な不正行為をあばいてやりたいと思つたからであるが、彼の行動を探すが、あんなにも難しかりうとは、まるで予想していなかつたのである。

それは、彼は極度の人嫌いであり、世間に顔出しをせぬ男であつたからである。つまり、彼の厭人病と秘密病は、作家仲間や雑誌記者の間に知れ渡つていた。また、彼はよく転宅したり、殆ど年中病氣と称して、作家の会合などにも顔を出したことがなかつたのである。それは、一体、なぜなのか？ それは、言うまでもなく、探偵作家「大江春泥」とは、すなわち、「静子自身」であつたからである。そして、そのことを世間や夫に知られることを何よりも恐れていたとともに、もう一つは、静子自身にはもつと恐ろしい「密かな計画」があり、それを遂行するためにはどうしても必要不可欠な道具立てでもあつたのである。また、「……春泥の細君というのが、なかなかの賢夫人で、本田は原稿の交渉や催促なども、その細君を通じてやるが多かつた」とあるが、その「細君」も、当然のことながら、「静子自身」が変装して対応していたのである。一方、その「本田」という人物であるが、彼は、雑誌記者であり、また、彼は殆ど春泥の係りの様にして、春泥に原稿を書かせる仕事をやっていた時代もあつたので、その「本田」という人にも、いわゆる「春泥捜し」を手伝ってもらふことになるのである。

五、新たな脅迫状

さて、問題の「春泥捜し」は、少しも進展しない状況のまま、やがて、静子から主人公（寒川）へ一本の電話がかかって来る。その「内容」は、次のようなものである。つまり、「……ある日小山田静子から私の宿へ電話がかかって、大変心配な事が出来たから、一度来て欲しい。主人は留守だし、召使達も、気の置ける様な者は、遠方に使いに出し、待つている」というのであった。そこで、早速、浅草山の宿にある彼女の家を訪ねてみると、そこには、一寸昔の寮といった感じの古めかしい建物立ち、正面から見たのでは分からないが、その家の裏は、大川が流れているのではないかと思われた。——この「家の裏は大川」ということが、やがて起こる事件と深く関わって来るのである。そして、母屋の裏の方に建っている「二階建ての西洋館」（その「洋館」の方の「応接間」へと案内される。そこには、静子がただならぬ様子で待ち構えていて、大江春泥からの一通の封書（脅迫状）を、主人公（寒川）に恐る恐る差し出すのであった。

* *
静子、お前の苦しんでいる様子が目に見える様だ。お前が主人には秘密で、私の行衛をつきとめようと苦心しているのは、ちゃんと私には分かっているが、私の所在は分りつこはないのだ。私がどんなに用意周到な男であるかは、私の過去の作品を見ても分る筈ではないか。——さて、私の復讐事業は第二段に移る時期に達した様だ。お前も知っている通り、私は夜毎のお前の行為を眺めている内に、当然お前達の夫婦仲の睦じさを見せつけられ、私はむろん烈しい嫉妬を感じないではいられなかった。そこで、最初の予定では、お前を怖がらせ抜いてから、徐にお前の命を奪おうと思ったが、この間のお前達の夫婦仲を見せつけられるに及んでは、お前を殺す前に、お前の愛する夫の命を、お前の目の前で奪い、その悲嘆を十分に味わせた上で、お前の番にした方がよいと、私は極めたのだ。

三月十六日深夜

復讐鬼より

* *
さて、今回の新たな「脅迫状」は、最初の「静子へのひたすらの恨み」とは違って、それは、「……夜毎のお前の行為を眺めている内に、お前達の夫婦仲の睦じさに烈しく嫉妬して、お前を殺す前に、お前の愛する夫の命を奪うことに極めた」というものである。これは、一体、何を意味するのだろうか？　つまり、今回は、なぜか「夫婦仲の睦じさ」を殊更に強調している。それは、一体、なぜなのか？　それは、静子の「真の「目的」は、実は「夫殺し」にあるのである。それゆえ、「夫婦仲の睦じさ」を殊更に強調しておく必要性が、何が何でもあったということである。というのも、「……夫が殺されて、最初に疑われるのは、誰でもない、それは、妻だからである」。——つまり、警察に、夫との「夫婦仲」は、どうだったと疑われた時に、二人の「夫婦仲」は、誰もが嫉妬するほどの「睦じさ」であったと、主人公（寒川）に心の底からそう言わせるための、つまり、「生き証人」に仕立てるための、まさに巧妙な「仕掛け」でもあるのです。それは、最初から今度の「脅迫状」に至る迄、夜毎の「夫婦の行為」を徹に入り細に入るまで事細かに描き出すことによって、「夫婦仲の睦じさ」を徹底して主人公（寒川）の「頭の中」（或いは「心の中」）に刷り込ませ、静子が「疑われた時」に、「……彼女（静子）には、夫を殺す理由（動機）など何もない」と、主人公（寒川）に証言してもらうための、まさに巧妙な「仕掛け」でもあるのである。つまり、静子は、探偵小説家の「寒川」を巧みに利用して、まさに「夫殺し」の「完全犯罪」を綿密に計画して、それを今、現に実行しようとし

ているのである。

六、屋根裏の遊戯

ところで、静子は、居間で縫物ぬいものをしていた時、女中が「春泥の手紙」を持って来たので、布々封こわこわを切つて読んでみると、前述のような内容であり、もうじつとしておられず、何とはなく部屋の隅へと歩いて行くと、頭の上から、「……金のふれ合う様な、カチ、カチつという音が、非常に幽かであるが、確かに聞こえて来た」と言うのであった。そこで、主人公（寒川）は、「……結局、私が『屋根裏の遊戯』の中の素人探偵の様に、手提電灯ていすいとうを持ち、静子の居間の天井裏へ上つて、そこに人のいた形跡があるかどうか、若し居たとすれば、一体どこから出入しゅつにゅうしたのかなどを、確かめて見ることになった」とある。そして、そこには梁はりの上にも、天井板の上にも、確かに最近人の通つたらしい跡が残っていた。私はもう夢中になつて、そのあとをつけ始めた。彼は殆ど家中の天井裏を歩き廻つたらしく、どこまで行つても、梁の上のほこりの痕は尽きない。そして、静子の居間と静子等の寢室の天井に、板のすいたところがあり、その箇所だけほこりが余計に乱れていた。

むろん、それは、静子自身、事前に天井裏を歩いて、手足の痕を付けておいたものであるが、それは、なぜかと言えば、それは、言うまでもなく、大江春泥は、天井裏から「夫婦の行為」を覗いていたからこそ、脅迫状にあるような「事細かな描写」も可能だったとするためである。——そして、主人公（寒川）は、下の部屋を覗いてみたが、天井板の隙間から見た「下界」の光景の不思議さは、誠に想像以上であった。人間というものが、目の角度によつては、こうも異様に見えるものかと驚いた程であった。そこには少しも飾らぬ生地きじのままの人間が、そのまま暴露されているのだ。上から見た静子は、やや上品さを失つた様ではあったが、その代わりに、彼女の持つ一種不可思議なオブシニティ（卑猥さ）が一層色濃く私に迫つて来るのを感じた。そして、丁度静子の居間の上のところに、小さな鼠色の丸い釘ボクシが一つ落ちていた。そして、ほこりの乱れた痕を辿つて行くと、それは玄関横の物置きの上で止まっています、物置きの粗末な天井板は、持ち上げると難なくとれた。恐らく、大江春泥は、人通りのなくなつた頃を見はからい、人の背よりは少し高いコンクリートの塀しほを乗り越えて、錠前のない物置きから、屋根裏に忍び込んでいたのである。そこで、（怖がる）静子は、（もちろん、夫には平田や春泥のことなど何も言わないで）、何か他の口実をつけて、西洋館の二階に「客間の寢室」があるので、夫婦の「寢間」をそちらへと移したのである。西洋館ならば、天井からの隙見すきみも出来ないからである。

しかし、この表面的には「何気ない変化」（つまり洋館の「二階に寢室」を移すということ）こそは、静子が密かに計画していた、その夫殺しの「完全犯罪」を完成させるためには、何が何でも必要不可欠の、まさに「必須の条件」だったのである。

そして、脅迫から二日後の三月十九日深夜、彼の予告の通り、第一の犠牲者として、小山田六郎氏の息の根は断たれたのであった。

七、事件の経緯

では、事件の「経緯」であるが、それは、「……私は静子からの知らせで、その日の夕

刻小山田家に駆けつけ、初めて凡ての事情を聞き知った。六郎氏は、その前日、別段変りなく、いつもより少し早めに会社から帰宅して、晩酌を済ますと、川向うの小梅の友人の所へ、暮を囲みに行くと言つて、暖い晩だったので大島の裕に鹽瀬の羽織だけで外套は着ずブラリと出掛けた。それが午後七時頃のことであり、遠くはないので、彼はいつもの様に、散歩旁々、吾妻橋を迂回して、向島の土手を歩いて行つた。そして、小梅の友人の家に十二時頃までいて、やはり徒歩でそこを出たという所まではハッキリ分つているが、それから先が一切不明である。——一晩待ち明かしても、帰りがないので、静子は非常に心をいため、朝になるのを待兼ねて、知つている限り、心当りの所へ電話や使で聞合わたが、どこにも立寄つた形跡がない。六郎氏は、会社へも顔を出さず、会社の方でも色々手を尽くして探してみたが、どうしても行衛が分らぬ。もうお昼近くになつてしまつた。丁度そこへ、象潟警察から電話があつて、六郎氏の変死を知らせて来たのであつた。

それは、三月二十日の朝八時頃、浅草仲店の商家の若いお神さんが、吾妻橋の汽船発着所へ来て、船を待合せる間に、女の便所（下は川水）に入ると、便所の長方形の穴の真下に、一人の男の顔が浮いていたので、キヤツと悲鳴を上げて、大騒ぎとなり、引き上げるに、それが、碌々商会の重役である小山田六郎氏の、悲惨な亡骸であり、それは、パンツ一つの裸体であり、頭にはふさふさの鬘をつけ、水中での発見にも拘らず水を呑んだ形跡はなく、致命傷は、左肺部に受けた、鋭い刃物の突傷であり、致命傷の外に数ヶ所浅い突傷があり、犯人は幾度も突きそこなつたものらしいとある。

そして、主人公（寒川）の「最初の推理」は、帰途、吾妻橋を通りかかった時に、彼を汽船発着所の暗がりへ連れ込み、そこで凶行に及び、死体を河中へ投棄したとともに、下手人は、春泥であることに、疑を挟む余地はないと考えるのであつた。そして、今度は、静子の番に違いないと考えると、静子と主人公（寒川）は、一人して春泥に脅迫されていたことを警察に届け出て、保護を求めることになるのである。

八、事件の手がかり

さて、一ヶ月間、警察は全力をあげて大江春泥を捜索していたし、わたしも本田に頼んだり、その他の新聞記者雑誌記者など、逢う人ごとに、春泥の行動について、何か手がかりになるような事実を聞き出そうと骨折つていたにも拘らず、杳としてその行動が分からないのであつた。——一方、静子（今は未亡人）と主人公（寒川）との間柄は、いわゆる「六郎氏変死事件」を境にして、俄かに親密の度を加えて行つた。それは、静子は、最初から、小説の愛読者として、私に少なからぬ好意を持つていたとともに、こういう複雑な関係が生じて来たのだから、彼女が私を二なきものに頼つて来たのは、誠に当然のことであつた。そして、しょっちゅう逢つていると、殊に未亡人という境遇になつて見ると、今迄は何かしら遠い所にあるものの様に思われていた彼女のあの青白い情熱や、なよなよと消えてしまふ相な、それでいて不思議な弾力を持つ肉体の魅力が、俄かに現実的な色彩を帯びて、私に迫つて来るのであつた。殊に、偶然彼女の寝室から、外国製らしい小型の鞭を見つけ出してからというもの、私の悩ましい欲望は、油を注がれた様に、恐ろしい勢いで燃え上がったのである。

そして、四月二十日は、故人の命日に当たるので、静子は、夕刻から親戚や故人と親し

かった人々を招いて、仏の供養を営み、私もその席に連なった。その晩、湧き起った二つの「新しい事実」は、恐らく、一生涯忘れることの出来ない、大きな感動を私に与えたのである。——さて、客はみな帰り、私は静子と並んで、薄暗い廊下を歩いている時、静子は、突然、恐ろしい叫び声を立てて、私にしがみついて来たのである。もちろん、それは、静子の計算であるが、ガラス窓の外を指さすと、主人公（寒川）は、「イヌですよ、イヌですよ、怖がることはありませんよ」と、静子の肩を叩きながら、いたわるように言ったものだが、静子の片手が私の背中を抱いていて、生暖かい感触が、私の身内まで伝わっているのを感じると、アア、私はとうとう、矢庭に彼女を抱き寄せ、八重歯のふくれ上った、あのモナ・リザの唇を盗んでしまったのである。そして、それは私にとって幸福であったか不幸であったか、彼女の方でも、決して私をしりぞけなかったばかりか、私を抱いた彼女の手先に、私は遠慮がちな力さえ覚えたのであった。しかも、それが亡き人との命日であっただけに、私達は罪を感じる事が一入深かった。二人はそれから私が自動車に乗ってしまうまで、一言と口を利かず、目さえそらす様にしていたのを覚えている。

そして、まず一つの思いつきは、その「車の中」で起こるのである。主人公（寒川）は、車の中でも静子のことばかり考えていて、「……唇には、まだ彼女の唇が感じられ、鼓動する胸には、まだ彼女の体温が残っていて、飛び立つばかりの嬉しさと、一方、深い自責の念とが複雑に錯綜していた」が、前の運転手のハンドルを握る手袋のホックの飾釦を見ているうちに、主人公（寒川）は、やがて、小山田家の天井裏で拾ったあの「金属の丸いもの」とは、実は手袋の「飾釦」だったのかと思うのであった。そこで、運転手に「手袋」のことをいろいろ聞いてみると、「……寒い時分に、亡くなった小山田の旦那からもらったものであり、飾釦は、最初から右手にはなかった」と言うのであった。それを聞いて、主人公（寒川）は、もし小山田家の天井裏で拾ったあの「金属の丸いもの」が、もし「小山田六郎氏」の手袋のものだとすれば、天井裏を散歩していた人物とは、実は「小山田六郎氏」ということにならないかと思うのであった。そこで、主人公（寒川）は、その「手袋」を（いわば証拠品として）相当の代価で譲り受けたのであった。

そして、もう一つ変なことに気づいた。それは、頭の中に、「……大きなUの字が現われた。Uの字の左端上部には山の宿がある。一方、右端の上部には小梅町（六郎氏の暮友達の家の所在地）がある。そして、Uの字の底に当る所は丁度吾妻橋に該当するのだ。あの晩、六郎氏は、Uの右端上部を出て、Uの字の下部の吾妻橋までやって来て、そこで春泥の為に殺害されたとばかり考えていたが、しかし、大川は、Uの上部から下部に向って流れているのだ。若しも死体が流れて来たはずれば、それは、一体、どこから流れて来たのか。つまり、凶行は、一体、どこで演じられたのか？」と、私は、深く深く「妄想の泥沼」へと沈み込んで行くのであった。……

九、本格的な推理 其の一

私は、幾晩も幾晩もそのことばかり考え続けた。そして、五日ばかりの間に、私は実に途方もない妄想を組立ててしまったのである。この推理は、私達探偵小説家の空想力を以てでなければ、恐らく組立て得ない体のものであったとある。これは、一体、どういうことを意味するのかと言えば、それは、次のようなことである。——つまり、静子は、密か

に夫殺しの「完全犯罪」を綿密に計画していたのである。そして、その「静子」という女性性は、探偵小説家「寒川」の書く小説の愛読者でもあり、それゆえ、探偵小説家「寒川」の「推理の仕方」(その「特徴や傾向」)などは、よく熟知していたのである。そこで、探偵作家「大江春泥」でもある「静子」は、探偵小説家「寒川」であれば、必ず、こういうふうには「推理」するだろうという、そういう「筋立て」を考えに考え抜いて、まさに夫殺しの「完全犯罪」を密かに狙っていたのである。

それは、最初の「出逢い」から始まり、親しくなったところで、今度は、昔の恋人「平田一郎」からの「脅迫状」、しかも、その昔の恋人「平田一郎」は、何と探偵作家「大江春泥」になっていた。そして、夜毎の「夫婦の睦じさ」に烈しく嫉妬して、静子より先に「愛する夫殺し」を予告して、実際に「殺害」してしまふ。もちろん、探偵小説家「寒川」であれば、昔の恋人「平田一郎」や探偵作家「大江春泥」などの「からくり」(うそ)は、やがては「見抜く」に違いない。そこで、今度は、探偵作家「大江春泥」の作品「屋根裏の遊戯」に似せた「からくり」(うそ)を創り出す。それは、天井裏に「手袋の飾釦」を一つ落としておく。その「釦が取れて使えなくなった手袋、それは、実は小山田氏の手袋であるが、それを運転手が持っている」という展開も、むろん、静子が考え出したものであり、鍵のかかった書棚、寝室の鞭、その他、つまり、すべては、静子の、まさに「仕込み」であり、その「仕込み」に添うように、探偵小説家「寒川」は、次のように「推理」するのである。その「本文」は、非常に長いので、ごく簡単に要約してみたいと思う。

*

*

私は、あの天井裏で拾った金属が、小山田氏の手袋のホックから脱落したものだとは知らず、私の心の隅に蟠りとなっていた色々の事実が、この私の発見を裏書きでもする様に、続々思い出されて来たのである。六郎氏の死体が鬘を冠っていたこと。その鬘は六郎氏自身注文して拵らえたものであること、六郎氏の変死と同時に、まるで申し合せた様に、平田の脅迫状がバツタリ来なくなったこと、六郎氏が見かけによらぬ、恐ろしい「惨虐色情者」(サディスト)であったこと等、これらの事実は、よくよく考えると、悉くある一つの事柄を示唆していることが分かる。私の推理を一層確実にする為、出来るだけの材料を集めることに着手した。そこで、故六郎氏の書斎を調べてみると、鍵のかかった書棚が見つかるが、その鍵はなく、許可を得て壊して開けてみると、その中には、六郎氏の数年の日記帳、幾つかの袋に入った書類、手紙の束、書籍などが一杯入っていたが、それを丹念に調べた結果、この事件に関係ある「三冊の書冊」を発見したのである。

まず、その一つは、六郎氏と静子夫人との結婚の年の日記帳で、赤インクで、「……余は平田一郎なる青年と静子との関係を知れり。……(以下省略)」。つまり、六郎氏は、結婚の当初から、夫人の秘密は知っていたが、それを夫人には一言も言わなかったとある。しかし、なぜ、「赤インク」なのか？ これは恐らく、静子を書き加えたものであり、平田一郎も彼との恋愛関係も、実際はどうであったかはよく分からないが、しかし、もし「平田一郎」という人物が実在人物だとすれば、いつひよっこりとその「姿」を現わし、何を語るかも分からない。そんな危険を敢えて冒すだろうか？ ——それゆえ、平田一郎も彼との恋愛関係も、どこまで本当のことなのか厳密にはよく分からないままなのである。

第二は、大江春泥短編集「屋根裏の遊戯」である。かかる書物を、実業家小山田六郎氏の書斎で発見とは、何という驚きかとあるが、これも、静子が入れて置いたものであり、

それは、この本を真似て、小山田六郎氏は、天井裏を散歩するようになる。その時に、指紋消しとして手袋を使用したのが、その手袋の「飾釦」をうっかり落としてしまったという、そういう展開（つまり推理）を、主人公（寒川）にさせるためのものである。

第三は、博文館発行の雑誌「新青年」第六卷第十二号である。これには春泥の作品は掲載されていないが、その代り、口絵に彼の原稿の写真版が原寸のまま原稿紙半枚分程、大きく出ていて、余白に「大江春泥の筆跡」と説明がついていた。妙なことは、その写真版を光線に当ててよく見ると、厚いアートペーパーの上に、縦横に爪の痕のようなものがついている。これは誰かが写真の上に薄い紙を当てて、鉛筆で春泥の筆跡を、幾度もなすったものとしたか考えられないとある。これも、「大江春泥の筆跡」を真似て、小山田六郎氏が、まさに「脅迫状」を書いたと、主人公（寒川）に「推理」させるためのものである。

また、同じ日、夫人に頼んで、六郎氏が外国から持ち帰った手袋を探してもらうと、その結果、私が運転手から買取ったものと、寸分違わぬ品が一揃いだけ出て来る。夫人は、それを私に渡した時、確かに同じ手袋がもう一揃いあるはずなのに、不審顔であった。——かくして、我々が今迄犯人と信じ切っていた大江春泥こと平田一郎は、意外にも、最初からこの事件に存在しなかったと考える外はありませんとなり、結局、小山田六郎氏自身が、実は犯人であったという寒川の最初の「本格的な推理」になるのである。

*

*

一方、小山田氏は、今より約四年前、社用を帯びて欧州に旅行をし、ロンドンを主として、その他、二、三の都市に二年間滞在していたが、彼の悪癖は、恐らく、それらの都市の何れかにおいて芽生え、発育したものでしょう。もし、そうだとすれば、静子と結婚をしたのは、七年前であるから、その頃はまだ、それほど異常ではなかったが、帰国後、本格的な「惨虐色情者」（サディスト）となり、静子夫人の身体には生傷が絶えないようになってしまふのである。それは、こころ、二年のことになるのだろう。……

つまり、一昨年九月、帰国（事件は三月）とともに、彼の治し難い悪癖は、彼の溺愛する静子夫人を対象として、猛威をたくましくし始めたものでしょう。私は昨年十月（博物館での出逢い）、静子夫人と初対面の折、已に彼女の項にかの不気味な傷痕を認めた程度である。——この種の悪癖は、例えば、かのモルヒネ中毒の様に、一度染んだなら一生涯止められないばかりでなく、日と共に月と共に恐ろしい勢いでその病勢が昂進して行くものであり、より強烈なより新しい刺戟をと、追い求めるものである。今日は昨日のやり方は満足出来ず、明日は又今日の仕草では物足りなく思われて来る。小山田氏も同様に、静子夫人を打擲するばかりでは満足が出来なくなつて来たことは、容易に想像出来ます。そこで、彼は物狂おしい新しい刺戟を探し求めなければならなかつたのである。

丁度、その時、何かのきっかけで、大江春泥作の「屋根裏の遊戯」という小説を知り、それを読んでみると、異様な同病者を見つけ出し、遂には自ら自宅の天井裏に忍び込んで、静子夫人の独居を隙見しようとして企てたのである。むろん、それだけでは飽き足らず、「屋根裏の遊戯」を愛読していた六郎氏は、その奥付の作者の本名を発見し、それが嘗つて静子にそむかれた彼女の恋人であり、彼女に深い恨みを抱いているに相違ない平田一郎と同一人物だと知ると、今度は、平田一郎の名を騙つて「脅迫状」を作成して、それを自分の妻に送るといふ犯罪めいた趣味と、妻がそれを読んで震え戦く様を天井裏から胸を轟かせながら隙見するという悪魔の喜び、むろん、その間々には、かの「鞭の打擲」

も相変わらず続けていたのである。これらの理由により、かの「脅迫状」の制作者は、実は「小山田六郎氏」であつたという、主人公（寒川）の本格的な「推理」になるのである。むろん、これは、明らかに間違つた「推理」であるが、しかし、そのような間違つた「推理」へと仕向けたのは、誰でもない、それは、まさに「静子」その人なのである。

つまり、鍵のかかつた書棚の中から出て来た「三冊の書冊」を根拠にして、組み立てた「推理」であり、一つは、結婚の年の日記帳に、赤インクで、「……余は平田一郎なる青年と静子との関係を知れり。……（以下省略）」とあるが、それは、静子が書き加えたものに過ぎず、もともと平田一郎との恋愛関係も、どこまで本当かは分からないのである。

次は、大江春泥短編集「屋根裏の遊戯」が、その書齋の本棚にあつたというのも、もちろん、静子がそこに入れて置いたものであり、それゆえ、実際の実業家小山田六郎氏という人は、大江春泥短編集「屋根裏の遊戯」など読んだこともなければ、ましてや「屋根裏の散歩」などしたこともないのである。そして、もう一つは、雑誌「新青年」に載つた「口絵」に大江春泥の原稿の写真版が原寸のまま大きく出ていて、余白に「大江春泥の筆跡」とあるが、妙なことには、誰かが写真の上に薄い紙を当てて、鉛筆で春泥の筆跡を、幾度もなすつたような痕跡があるというのも、そのようなものを静子が自ら作り出して、それを入れて置いたのであり、それは、「大江春泥の筆跡」を真似て、小山田六郎氏が、まさに「脅迫状」を書いたと、主人公（寒川）にそう「推理」させるためのものであり、すべては、静子の「仕掛け」であり、すべては、静子の「思い通り」（つまり「思う壺」）になつたということである。

*

*

さて、元々は、単に「変態性慾者」の「趣味行為」に過ぎなかつたものが、どうしてあの様な「殺人事件」となつて現われたのか。しかも殺されたのは当の六郎氏であつたばかりでなく、彼はなぜにあの奇妙な「鬘」を冠り、真裸になつて、吾妻橋下に漂つていたのか。また、彼の背中の突傷は何者の仕業であつたのか。大江春泥がこの事件に関与しなかつたとすれば、外に別の犯罪者があつたのであるか、等々の疑問が次々と生じて来るかと思うが、それについては、私の「観察と推理」とを申し述べねばならないとある。

そこで、まず、彼の「鬘」の問題から考えてみたいと思うが、それは、小山田六郎氏自らが注文したものであり、その本来の「目的」は、元々、いわば「変態遊戯」を行なう時に、禿げ頭では様にならないと考え、それを隠す変装用のものであつたが、一方、主人公（寒川）の「推理」では、洋館へと移つてからは、天井裏の遊戯ができず、そこで今度は、彼自身大江春泥に化けて、静子がそこにいるのを見すまして、洋館の窓の外からチラリと顔を見せて、ある不思議な快感を味おうと企んだのだと考える。また、その「猿股一つ」に関しても、それは、まさに「変態遊戯」を行なっている「最中の姿」であつたが、主人公（寒川）の「推理」では、吾妻橋下に「屍体」で漂っている時に、周辺に住む浮浪者か乞食などに「着物や高級時計」などは剥ぎ取られたのだらうと考えるのであつた。

それでは、いよいよ「主人公」（寒川）の、その最初の「本格的な推理」の「結論」（クライマックス）であるが、それは、次のようなものである。

つまり、「……あの夜（三月十九日）、六郎氏は小梅の碁友達の所から帰り、まだ門が開いていたので、召使達に知らぬ様、ソツと庭を廻つて洋館の階下の書齋に入り、闇の中で例の鬘を冠り、外に出て、立木を伝つて洋館の軒蛇腹に上り、寢室の窓の外へ廻つて

行つて、そのブラインドの隙間から、ソツと中を覗いていたのである。しかも、その洋館の窓は、隅田川に面して、殆ど軒下程の空地もなく、コンクリート塀で囲まれていたが、そのコンクリート塀の上部には（防犯用の）ビール瓶の破片が植え付けられていて、六郎氏は、軒蛇腹から転落した勢いで、その（防犯用の）ビール瓶の破片にぶつかつて、背中の肺部に達する程のひどい突傷を負つたというのである。

つまり、「……かようにして、六郎氏は自業自得、彼のあくどい病癖の為に、軒蛇腹から足を踏みはずし、塀の上部（ビール瓶の破片）にぶつかつて、致命傷を受け、その上、隅田川に墜落し、流れと共に吾妻橋汽船発着所の便所の下へ漂いつき、とんだ死に恥をさらした訳である」と考へる。（つまり「事故死」と見ている）。これが、主人公（寒川）の、最初の「本格的な推理」であるが、しかし、これは、まさに静子の「仕掛け」通りの、また、静子の「思い通り」の（つまり「思う壺」の）「推理」になつているのである。

十、ひとときの逢瀬

さて、糸崎検事に提出する為の、右の「意見書」を書き上げたのは、四月の二十八日であつたが、主人公（寒川）は、翌日、早速、静子を安心させようと、小山田家を訪ねるのであつた。当時、静子の身辺では、六郎氏の遺産処分をめぐる、毎日のように親族たちが寄り集まつては、色々面倒な問題が起こつていたらしかつたが、殆ど孤立無援状態の静子は、余計に私を頼りにして、私の訪問を大騒ぎをして歓迎してくれたとある。そして、主人公（寒川）は、「……静子さん、もう心配はなくなりましたよ。大江春泥なんて、初めからいなかつたのです」と言い出し、静子を驚かせ、持参した意見書の草稿を、静子のために朗読したのである。——もちろん、静子の「心の中」では飛び上がらんほど嬉しかつたに違いないが、そういう表情を少しも見せるともなく、ただ、「マア」と言つたきり、ぼんやりしていたが、やがて、その顔にはほのかな安堵の色が浮かんで来たのである。

そして、丁度、夕食時だったので、気のせいかわかぬが彼女は、洋酒などを出して、私をもてなしてくれた。私は私で、意見書を彼女が認めてくれたのが嬉しく、勧められるままに、思わず酒を過したとある。——これはもちろん、男でも女でも相手に酒をたらふく飲ませては、相手を何とかしようという常套手段の一つに過ぎないのである。

そうして暫く話している間に、酒の酔いが私にすばらしい計画を思いつかせた。それは、どこか人目につかぬ場所に、家を一軒借りて、そこを静子と私との構曳の場所と定め、誰にも知られぬ様に、二人だけの秘密の逢瀬を楽しむということであつた。その時、私は、女中が立去つたのを見届けてから、いきなり静子を引寄せ、彼女と第二の接吻を交しながら、私はその思いつきを彼女の耳に囁いたのである。すると彼女は、それを拒まなかつたばかりか、僅かに首をうなずかせて、私の申し出を受け入れてくれたのである。

それから二十日余りの、彼女と私との、あの屢々の構曳を、ただれ切つた、悪夢の様なその日その日を、何と書き記せばよいのだろうか。——ある日、静子が芍薬の大きな花束の中に隠して、例の六郎氏常用の外国製乗馬鞭を持って来た時には、私は何だか怖くさえた。彼女はそれを私の手に握らせて、六郎氏のように彼女のはだかの肉体を、打擲せよと迫るのだった。恐らく、長い間の六郎氏の残虐が、とうとう彼女にその病癖をうつし、彼女は被虐色情者の、耐え難い欲望にさいなまれる身となつていたのである。私も亦、若

し彼女との逢う瀬がこのまま半年も続いたなら、きっと六郎氏と同じ病に取り憑かれてしまったに相違ないと思うのであった。

さて、それが他人にどれほど異常と見えようとも、静子にしてみれば、女学校以来の「夢」が、まさに「現実のものとなった」のである。それゆえ、静子の「頭の中」(或いは「心の中」)では、この上もない「無上の喜びに満たされていた」に違いない。それをもっと言えば、静子のその全「人生」の中で、いちばん「幸せな時期」でもあったのである。

つまり、静子という女性は、恐らく、女学校時代から、探偵小説家「寒川」の作品を熱心に愛読していただけではなく、その「寒川」という探偵小説家を、一人の男性としても、彼に強く心惹かれていて、いわば「恋愛感情」のようなものを持っていた、まさに「心の恋人」でもあったのである。それを、もっと具体的に敢えて言えば、静子という女性は、その探偵小説家「寒川」という男性に、いつか「抱かれることをずっと夢見てきた」ということでもある。その「夢が叶う」(つまり「現実のものにする」)ための、まさに「夫殺し計画」でもあるのである。それゆえ、相談相手は、何が何でも、探偵小説家「寒川」でなければならぬし、また、それは、「夫」がことさら憎くて殺したのでもなく、また、「財産」がことさら欲しくて殺したのでもないのである。そうではなくて、彼女が「心の底」から欲したものは、一つは、夫の「束縛」からの解放であり、そして、もう一つは、「心の恋人」でもあった「寒川」を本当の「恋人」にすることだったのである。そのためには、夫の存在、その夫からの「解放」、それがどうしても必要不可欠だったのである。——ここに、初めて「夫殺し」という「考え方」が、はっきりと生じて来るのである。

それでは、もう一度、再確認しておきたいと思うが、静子は、女学校を卒業する間際まで、至極幸福に育ったとある。その後の、平田一郎という青年との恋愛は、うそとも本当とも判別し難いが、少なくとも平田一郎、即、春泥ではなく、春泥は、静子であり、丁度、その時、彼女の一家に大きな不幸が訪れ、彼女の父は、多額の借財を残して、殆ど夜逃げ同然に、身を隠さねばならなくなったのである。——その結果、彼女は、女学校を中途退学となり、父親は、それが元でやがて病気で亡くなり、母親との貧しい二人暮らしが始まるのである。そのような時に、やがて実業家小山田六郎氏が彼女を見染め、結婚を申し込む。静子も小山田氏が嫌いではなかった。年こそ十歳以上も違っていたが、小山田氏のスマートな紳士振りに、あるあこがれを感じていたのである。そして、母親と共に、東京の邸に住むようになる。それから七年の歳月が流れ、彼女の母親は、三年後に病気で亡くなることになるが、ここまでは、静子は、恐らく、幸せだったに違いない。

やがて、小山田氏は会社の要務を帯びて、二年ばかり海外に旅をすることになるが、その二年の間に、小山田六郎氏は、何時しか本格的な「惨虐色情者」(サディスト)となつて帰って来るのである。一方、静子は、毎日、茶、音楽などの師匠に通つて、独居の淋しさを慰めていたという。むろん、そのようなことを実際にどの程度行なっていたのか、或いは、いわゆる「大江春泥」という作家名で、探偵小説などをもつぱら書いていたのかは、なかなか判別しがたいが、それは、どちらでも大きな問題ではなく、それよりも遙かに大事なことは、この二年間、静子は、夫から完全に解放されて、まさに「自由を満喫」していたのである。——ところが、夫の帰国後、そのような「自由」は完全に奪われてし

まったとともに、夫の小山田六郎氏は、やがて本格的な「惨虐色情者」(サディスト)となって、静子夫人の身体には生傷が絶えないような状態になってしまふのである。

むろん、もし静子という女性が、ひたすら「性的快感」だけを追い求める女性であったならば、或いは、それは、それで幸せであつたかも知れない。しかし、静子は、理智と文才とに恵まれた女性であり、このままでは、夫・小山田六郎氏の「性的奴隸」として縛られ続け、自分のやりたいことも何も出来ずに一生を終えてしまふ。それには、やはり抵抗があつたのである。できるならば、その夫の「束縛」から解放されて、もっと「自由」になりたいという、そういう想いが生じて来ても、何も不思議なことではない。つまり、誰かに「救い」を求めるような「心的状態」になつたということである。そのような時に、女学校時代から愛読していた探偵小説家「寒川」のことをふと想い出しては、その探偵小説家「寒川」に救いを求めるような形で、彼に近づき、そして、相談を持ちかけるようになったのである。……

十一、本格的な推理 其の二

さて、「物語」(ストーリー)は、いよいよ「佳境」(クライマックス)へと向かうわけであるが、その「きつかけ」は、やはり同じ「車の中」であり、それは、次のようなものである。つまり、「……さて、あまり顔を見せないのも変だということで、私は、小山田家を訪ねて、一時間ばかり談話をしたのち、例の御出入の自動車に送られて、帰宅をした」が、その自動車の運転手が偶然にも嘗て私が手袋を買取つた、青木民蔵であつたので、何気なく、「……君、この間の手袋ね、あれは一体いつ頃小山田さんに貰つたのだい」と聞くと、「そうですね、あれは、……十一月の二十八日でしたよ。間違ひありませんよ」と答える。「……へエ、十一月のねえ、二十八日なんだね」と、ボンヤリと考えているうちに、主人公(寒川)は、何かにふと気づいたように、「……君、それは本当だね、十一月二十八日ということは。……」と叫び、「……じゃ、君、もう一度引返すんだ、小山田邸へ」と告げ、門の前に着くと、車を飛び出し、女中を捕まえては、「……去年の暮れの煤掃きの折、この家では、日本間の方の天井板をすっかりはがして、灰汁洗いをした相だね。それは本当だろうね」と聞くと、「……エエ、本当でございます。灰汁洗いではなく、ただ水で洗わせたのですけれどね、灰汁洗い屋が来たことは来たのです。あれは暮れの二十五日でございます」と言うのであつた。

*

*

さて、これは、一体、何が問題になつていのかと言へば、それは、天井裏に落ちていた例の小山田氏の手袋の「飾釦」のことであるが、運転手は、「……それを十一月二十八日にもらつた」と言い、一方、女中は、「……天井板の掃除は、十二月二十五日でした」と言っている。——まず、大事なことは、運転手が手袋をもらった時には、右の手袋には、すでに「飾釦」は付いていなかった。だとすれば、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落とすのは、運転手が手袋をもらった十一月二十八日以前でなければならぬ。一方、天井板の掃除は、十二月二十五日に行ない、天井裏には何もない状態になつた。だとすれば、天井裏に落ちていた手袋の「飾釦」は、十二月二十五日以降でなければならぬ。これは、まったく一致しない。つまり、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落とせるのは、運転

手に手袋を与える十一月二十八日以前までであり、運転手に手袋を与えた十一月二十八日以降は、自分の手元にその手袋自体がないのだから、天井裏に落としようがないのである。だとすれば、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落とすのではなく、ほかの誰かでなければならぬ。それは、結局、静子が、十二月二十五日以降、天井裏に小山田氏の手袋の「飾釦」を意図的に落とすということである。

そして、考えて見ると、この事件には証拠が揃い過ぎていた。私の行く先々に、待構えていた様に、御あつらえ向きの証拠品がゴロゴロしていた。探偵は、多すぎる証拠に出会った時こそ、警戒しなければならぬのだ。私はまるで、大江春泥の指示に従って、彼の思うがままの推理を組み立てて来た様な気がする。——そう考えると、主人公（寒川）は、もう一度、一から、すべてを徹底的に考え直してみることにするのであった。

*

*

ところで、いつも私の方から出す構えの打合せの手紙が、三日ばかり途切れたものだから、待ちきれなくなったものか、静子から明日の午後三時頃、きつと例の隠れが来てくれる様にとの速達が来た。——静子は、私より一足先に来て、涼しい土蔵の中のベットに腰掛けて待っていた。土蔵の二階には、絨毯を敷きつめ、ベットや長椅子を置き、大型の鏡などを幾つも並べて、私達は遊戯の舞台を出来るだけ効果的に飾り立てたのである。

さて、主人公（寒川）は、まず、天井裏の「飾釦」の「疑問」から話を始めるが、それは、前述の通りであり、ここでは省略をして、次の「疑問」は、春泥の生活というものが、実に変で、なぜあんなにも度々転居したり、旅行をしたり、病気になるったりして、訪問者を避けようとしたか、いくら人厭いの小説家にしろ、あんまり変じゃないかということと、春泥が「犯人」だとすると、なぜ脅迫状が小山田氏の死後バツタリ来なくなったのか、静子を殺すことこそ、第一の目的ではなかったのか。また、日記帳や春泥の著作或いは「新青年」などが、どうして小山田氏の本棚に入っていたのか、小山田氏しか持っていないはずの、あの本棚の鍵を、春泥はどうやって手に入れたかという疑問である。

静子は、「……あたし怖いわ。あなたの話し方、気味が悪いのね。もうよしませうよ。そんな話。その話はあとにして、今日は遊びませうよ。あたし、あなたとこうしていれば、平田のことなんか、思出しもしないのですもの」と言うのであった。

主人公（寒川）は、「……まあ御聞きなさい」と言い、「……僕は、この事件の内から、ある不思議な一致を二つだけ発見した」と言う。その一つは、いわゆる「空間的な一致」であり、それは、大江春泥が転々として移り歩いた住所を、こうして地図の上で見ると、二ヶ所を除く、あとの七ヶ所は、不規則な円周を描いていることが分かる。その「円の中心」を求めれば、そこにこの「事件の鍵」が隠れているのだよ、と言うと、——静子は、いきなり両手を私の首にまきつけると、彼女の唇を私の唇に、しっかりとくっつけてしまった。そして、「……あなた、そんな怖い話で、大切な時間を消してしまうのが、悔しくてたまらないのですわ、あなた、あなた、私のこの火の様な唇が分かりませぬの、この胸の鼓動が聞えませぬの。サア、あたしを抱いて。ね、あたしを抱いて」と言うのであった。

一方、主人公（寒川）は、「……もう少しだ。もう少しだから辛抱して僕の考えを聞いて下さい。その上で、今日はあなたとよく相談しようと思つて来たのだから」と言い、そして、もう一つは、いわゆる「時間的な一致」であり、それは、春泥の名前がバツタリ雑誌から見えなくなった時期と、小山田氏が外国から帰国した時期とが、こんなにもぴった

りと一致していることです。この二つがどうして、こんなにもびったりと一致しているのかしら、あなたは どう思うと聞くと、静子は、部屋の隅から例の外国製乗馬鞭を持って来て、無理に私の右手に握らせると、いきなり着物を脱いで、うつむきにベッドの上に倒れ、むき出しのなめらかな肩の下から、顔だけを私の方にむりむけて、「……それがどうしたの、そんなこと、そんなこと」と何か訳の分からぬことを口走り、「……サア、ぶって！ぶって！」と叫びながら、上半身を波の様にうねらせるのであった。

*
小さな蔵の窓から、鼠色の空が見えていた。——静子も私も、あとになって考えて見ると、正気の沙汰ではなかったのだ。私はそこに横たわりもがいている彼女の汗ばんだ青白い全身を眺めながら、執拗にも私の推理を続けて行った。それは、「……一方では、この事件の中に大江春泥がいることは、火の様に明かな事実なんだ。だが、一方では、日本の警察力がまる二ヶ月かかって、あの有名な小説家を探し出すことができず、彼奴は煙のように完全に消え去ってしまった。それらは、一体、何を意味するのか？

主人公（寒川）は、終に、その最終的かつ決定的な「推理」を語るのであった。つまり、それは、「……サア、静子さん。よく聞いて下さい。僕の推理が間違っているかいなか。春泥の住所をつないだ円の中心はどこか。この地図を見て下さい。あなたの家だ。浅草山の宿だ。皆、あなたの家から自動車で十分以内のところばかりだ。……小山田氏の帰国と一緒に、なぜ春泥はその姿を隠したのか。もう茶の湯と音楽の稽古に通えなくなったからだ。分かりますか。あなたは小山田氏の留守中、毎日、午後から夜に入るまで、茶の湯と音楽の稽古に通ったのです。……ちちゃんとお膳立てをして置いて、僕にあんな推理を立てさせたのは誰だったか。あなたですよ、僕を博物館で捕えて、それから自由自在にあやつたのは。……あなたなれば、日記帳に勝手な文字を書き加えることだって、その外の証拠品を小山田氏の本棚に入れることだって、天井へ鉤を落して置くことだって、自由に出来るのです。僕はここまで考えたのです。外に考え様がありますか。さあ、返事をして下さい。返事をして下さい」と迫るのであった。

静子は、主人公（寒川）をずっと愛してきた。その愛する恋人から浴びせられた言葉に對して、静子は、「……あんまりです、あんまりです」と、裸体の静子は、ワツと悲鳴を上げて、私にとりすがって来た。そして、私のワイシャツの上に顔をつけて、熱い涙が私の肌を感じられた程にも、さめざめと泣き入るのだった」とある。——この静子の「心の中」をもう少し詳しく説明をするならば、それは、「……もし夫がいたならば、こうしてあなたと逢うこともできなければ、また、あなただつてわたしとこうなることを望んでいたのでしょうか。それなのに、わたしだけを『悪者扱い』にするなんて、あんまりです、あんまりです。わたしがどれほどあなたのことを愛しているか！ どうしてそれをわかってくれないのですか」と、彼の胸にその顔を沈めて、さめざめと泣いているのです。

一方、主人公（寒川）は、なお容赦なく、あなたは何故泣くのです。さつきから何故僕の推理を止めさせようとするのです。まだ僕の推理はおしまいじゃないのだ。大江春泥の細君は何故眼鏡をかけ、金歯をはめ、歯痛止めの貼り薬をし、洋髪に結つて丸顔に見せていたのか、すべて「変装」のためだ。あなたには八重歯があり、それを隠すために金歯をかぶせ、右の頬の大きな黒子を隠すために、歯痛止めの貼り薬をしていた、洋髪にしてうり顔を丸顔に見せていたのだ。サア、言つてしまいなさい、すっかり分かつてしまった

のだから、まだ、ぼくをごまかそうとするのですか。

私は静子をつき離すとともに、すっかり興奮してしまつて、思わず手にしていた乗馬鞭をふるつて、ピシリと彼女のはだかの背中を叩きつけた。私は夢中になつて、これでもか、これでもかと、幾つも幾つもうち続けた。見る見る、彼女の青白い皮膚は赤み走つて、やがて蚯蚓腫れの形に、真つ赤な血がにじんで来た。彼女は、いつもと同じみだらな格好で、手足をもがき、身をくねらせていたとある。そして、この「容赦なくとことん追い詰めていく心理、そうせずにはいられない心理」こそは、まさに典型的な「惨虐色情者」(サディスト)の「深層心理」そのものであり、主人公(寒川)自身、すでに何時しか「惨虐色情者」(サディスト)に、一面では染まつていたのである。

一方、静子は、絶入るばかりの息の下から、「平田、平田」と細い声で口走り、主人公(寒川)は、「……平田？ アア、まだ私をごまかそうとするんですか、……春泥なんているものか、あれは全く架空の人物なんだ。それをごまかす為に、あなたは彼の細君に化けて雑誌記者なんか逢つていたのだ」と言うのであつた。

しかし、この「平田、平田」という「言葉」が、主人公(寒川)の「頭の中」にはつきりと「記憶保存」され、いつまでも「耳の底」に残つては、もしかしたら、実際に「平田一郎」(或いは「大江春泥」という人物は、現実に存在するのではないかと、その後も、主人公(寒川)をずっと悩ませ続けるのであつた。

*

*

あなたは女にしては珍しく「理智と文才」に恵まれていた。そのあなたが、匿名でしかも男名前で、探偵小説を書いて見る気になつたのは、無理からぬことであり、その小説が意外に好評を博して、丁度あなたが有名になりかけた時分に、小山田氏が、二年間も外国へ行くことになつた。その淋しさを慰める為、且つはあなたの猟奇癖を満足させる為、あなたはふと「一人三役」という恐ろしいトリックを思いついた。一人は、恋人「平田一郎」(かつ探偵作家大江春泥)、一人は、その妻「平田夫人」(かつ春泥夫人)、そして、もう一人は、実業家小山田六助氏の夫人「小山田静子」であつた。……

そのために、あなたは殆ど毎日の様に午後一杯、茶の湯や音楽を習うのだと言つて、家をあげなければならなかつた。つまり、半日は小山田夫人、半日は平田夫人と、一つの身体を使い分けていた。それには髪型も変えたり、着物を替えたりする時間が必要であり、そこで、住所を変える時、山の宿を中心に、自動車で十分ぐらいの所ばかりを選んだのである。やがて、小山田氏が帰つて来た。もう元の様に一人二役を務めることは出来ない。そこで大江春泥の行方不明となるのである。だが、あなたがどうしてあんな恐ろしい罪を犯す気になつたのか、男の僕にはよく分からないが、変態心理学の書物を読むと、自分でも怖がり、他人にも気の毒がつてもらいたい気持ちなんですね。それと同時に、あなたは年をとつたあなたの夫に不満を感じてきた。そして、夫の不在中に経験した変態的な自由の生活に止み難いあこがれを抱く様になつた。いや、もっと言えば、犯罪そのものに、殺人そのものに、言い知れぬ魅力を感じたのだ。春泥を犯人に仕立てれば、あなたは永久に安全でいられる上、いやな夫には別れ、莫大な遺産を受け継いで、半生を勝手気ままに振る舞うことができるからである。

この主人公(寒川)の「推理」は、間違ではない。間違ではないが、しかし、最も大事なものが欠落している。それは、一体、何かと問えば、それは、次のようなことであ

る。——つまり、静子が「心の底」から欲したものは、確かに、一つは、夫からの「解放」ではあるが、しかし、それもこれも、すべて「心の恋人」でもあった「寒川」を本当の「恋人」にすることであり、その愛する「寒川」と一緒に暮らすことをずっと夢見ていたのである。この最も大事な静子の「女心」が、主人公（寒川）には、十分に読み解けていなかった。そのために、愛する静子に必要以上に辛く当たってしまったのである、その結果として、静子の「自殺」という悲劇へと向かってしまうのである。

* さて、主人公（寒川）は、なおも「推理」を推し進め、あなたは、万全を期するために二重の予防線を張った。そして、選り出されたのが私なんです。僕をごまかすのは、造作もなかったでしょう。しかし、犯罪者というものは、どこかにほんのつまらないしくじりを残して置くものです。それが、手袋の飾釦であり、何というつまらないしくじりだったでしょう。一方、小山田さんの致命傷は、やっぱり僕の前の推察通りだと思えます。ただ違うのは、小山田さんが窓の外からのぞいたのではなく、多分、あなたと情痴の遊戯中に、あなたが窓の中から突き落としたのです。サア、静子さん。僕の推理が間違っていましたか。何とか返事をして下さい。出来るなら僕の推理を打破して下さい。……

静子は、恥と後悔の為に顔を上げることが出来なかったのか、身動きもせず、一言も物を言わなかったとある。これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、主人公（寒川）という人は、自分の「推理」に余りにも酔ってしまい、静子の「心」を「思いやる」ことを怠ってしまったのである。——それは、自分の「推理」の論理展開ばかりに気をとられ、これでもかこれでもかと容赦なく相手を追い詰めるばかりで、静子の「せつない女心」というものを少しも理解しようとはしなかった。そのことが、結果として、静子を「自殺」へと追いやってしまうのである。それは、「静子」にもっとやさしく少しでも言いわけのできるような余地を残しておくべきだったのである。ところが、主人公（寒川）という人は、自分の「推理」に余りにも酔ってしまい、そのせめて一つぐらいいは残しておくべき「退路」の、すべての「退路」をすべて断ってしまったのである。それゆえ、静子は、たった「一言も言えない」、たった「一言の言いわけ」も出来ない、「精神状態」へと追い込まれてしまったのである。

* 私はい言いたいだけ言ってしまうと、ガツカリして、その場に茫然と立ちつくしていた。私の前には、昨日まで私の無二の恋人であった女が、傷ける陰獣の正体をあらわにして、倒れている。それをじつと眺めていると、いつか私の眼は熱くなった。

* そして、「……では僕はこれで帰ります」。「……あなたは、あとでよく考えて下さい。そして、正しい道を選んで下さい。僕はこの一月ばかりの間、あなたのお陰で、まだ経験しなかった、情痴の世界を見ることが出来ました。そして、それを思うと今でも僕は、あなたと離れ難い気がするのです。併し、このままあなたとの関係が続けて行くことは、僕の良心が許しません。僕は道徳的に人一倍敏感な男なのです。……では左様なら」。

私は静子の背中の蚯蚓腫れの上に、心をこめた接吻を残して、暫くの間彼女との情痴の舞台であった、私達の化物屋敷をあとにした、とある。

* さて、主人公（寒川）の「目」は、今や犯罪者を「見る目」に変わっている。静子の「深

く、傷ついた心」を、今こそ、心から癒すべき「相談相手」（恋人）となつて、これからどうしたらよいかを、親身になり、二人でどこまでも深く話し合うべきところを、主人公（寒川）という人は、その静子の「深く傷ついた心」をそのまま放置したまま、何のやさしい言葉をかけることもなく、一人で帰ってしまったのである。——それは、一体、なぜなのか？ それは、主人公（寒川）という人もまた、知らず識らずのうちに、いわゆる「惨虐色情者」（サディスト）の「心理状態」にどこか染まってしまう、本来の主人公（寒川）の「健全な精神」の働きが十分に機能しなくなっていたのである。

それでは、その「絶対的証拠」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、まさに「……私は言いたいだけ言ってしまうと、ガツカリして」という、この「言葉」こそは、まさにその「絶対的証拠」の「言葉」であり、それこそは、「……もつともつと何かないのか」という、まさに「惨虐色情者」（サディスト）の心理そのものであり、主人公（寒川）という人も、知らず識らずのうちに、いつの間にか自らも「陰獣」に染まっていたのである。

十二、事件の結末

それは、翌日の夕刊で、私は、静子の自殺を知つたのだった。彼女は、恐らくは、あの洋館の二階から、小山田六助氏と同じ隅田川に身を投じて、覚悟の水死をとげたのである。彼女の死体は、やっぱり、あの吾妻橋の汽船発着所のそばに漂つていて、朝、通行人に発見されたのであった。静子の死は、彼女が彼女の恐ろしい罪を自白したも同然で、まことに当然の成行きであると思つていた。少なくとも最初の一ヶ月間は、そう信じていた。

だが、やがて、恐ろしい疑惑が頭を擡げてきた。私は一言さえも、静子の直接の懺悔を聞いた訳ではなかった。様々な証拠が揃つていたとは言え、その証拠の解釈は凡て私の空想であつた。——なるほど、彼女は自殺をした。だが、それが果たして彼女の罪を証することになるだろうか。もつと外の理由があつたかも知れない。例えば、頼りと思う私から、あの様に疑い責められ、全く言い解くすべがないと知ると、心の狭い女の身では、一時の激動から、つい世を果敢なむ気になつたのではあるまいか。私はさつき他殺ではないと言つたけれど、これが他殺でなくて何であろうか。

彼女は、明らかに私を恋していた。恋する人に疑われ、恐ろしい犯罪人として責めさいなまれた女の心を考えて見なければならぬ。彼女は私を恋すればこそ、その恋人の解き難い疑惑を悲しめばこそ、遂に自殺を決心したのではないだろうか。また、たとえ、私のあの恐ろしい推理が当たつていたとしてもだ。彼女はなぜ長年つれ添つた夫を殺す気になつたのだろうか？ 自由か、財産か、そんなものが一人の女を殺人罪に陥れる程の力を持つていたのだろうか。それは、恋ではなかったか。そして、その恋人というのは、外ならぬ私ではなかったか。——アア、私はこの世にも恐ろしい疑惑をどうしたらよいのであろう。静子が殺人者であつたにしろなかったにしろ、私は、あれ程私を恋慕つていた可哀想な女を殺してしまつたのだ。私は、私のけちな道義の念を呪わずにはいられない。世に恋ほど強く美しいものがあるうか。私は、その清く美しい恋を、道学者の様なかたくなな心で、無残にも打ち砕いてしまつたのではないのか、と思ひ悩むのであつた。

*

*

さて、主人公（寒川）は、その後も、例えば、幾度も磯崎検事を訪ねて、その後の経過

を聞いて見たけれど、大江春泥捜索の見込みがついているとも見えぬ。また、人を頼んで、平田一郎の故郷である静岡の町を検べて貰ったけれど、今は行方不明の平田一郎なる人物があったことを報じて来ただけ、とか、その他、これらは、一体、何のために行なっていることかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。

つまり、「……私は、自分の推理癖、妄想癖を、悔んでも悔んでも悔み足りない程であった」とある。それは、一体、なぜなのか？ それは、自分の余計な「推理癖・妄想癖」が、結果として、静子を「自殺」へと追いやってしまったからである。しかも、「私は一言さえも、静子の直接の懺悔を聞いた訳ではない」とある。つまり、本人（静子）の「自供」（自白）というものは一言もなかったのである。それに加えて、また、なぜ「夫を殺した」のか、その「動機」もよく分からなければ、どのようにに殺したのか、その「殺害方法」さへもよく分かっているのではないのである。すべては主人公（寒川）の勝手な「推理・妄想」に過ぎないのである。——つまり、何一つ「確かなもの」はないのである。確かに、「……様々な証拠が揃っていたとは言え、その証拠の解釈は凡て彼の空想（推理）に過ぎない」のである。また、「平田一郎」についても、静子が言うようなことが実際にあったのかどうか、また、そもそも「平田一郎」という人間は、この世に現実存在する人間なのかどうか、それすらもよく分からない。それは、探偵作家大江春泥という人物も、どこまでがどうなのか、厳密には何一つ分かっていないのである。すべては主人公（寒川）の勝手な「推理・妄想」に過ぎないのである。だからこそ、もう一度、「平田一郎」や「大江春泥」について、できるだけ「正確な情報」を得ようとしているのである。そして、「……出来るならば、平田一郎の大江春泥の行方を捜す為に、たとえそれが無駄だとは分かっている」とある。それは、一体、なぜなのか？ それは、自分の勝手な「推理・妄想」によって、愛する静子が無惨にも「自殺」へと追いやってしまったことに対する、まさに「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）であり、それは、つまり、心の底から「すまない」という想いに深く襲われているということである。……

つまり、主人公（寒川）の恋人静子を見る「目」は、今や犯罪者を「見る目」に変わってしまった。本来ならば、静子の「深く傷ついた心」を、今こそ、心から癒すべき「相談相手」（恋人）となつて、これからどうしたらよいかを、親身になり、二人でどこまでも深く話し合うべきところを、主人公（寒川）という人は、その静子の「深く傷ついた心」をそのまま放置したまま、何のやさしい言葉をかけることもなく、一人で帰ってしまったのである。その結果として、愛する静子が無惨にも「自殺」へと追いやってしまったのだ。そのことを主人公（寒川）は、今、心の底から「すまない」と悔いているのである。

「参考文献」

※底本「陰獣」江戸川乱歩著（「角川ホラー文庫」）